

## 英米文学科同窓会第37回講演会

## 『ジェイン・エア』を読み解く —想像力の行方—

講師 緒方 孝文先生（青山学院大学教育人間科学部教授）



東京生まれ。1977年青山学院大学文学部英米文学科卒業、1981年同大学院文学研究科英米文学専攻修士課程修了。1983～87年米国シラキュース大学大学院修士課程に留学。現在、青山学院大学教育人間科学部教授。専門は主に19世紀イギリス小説。

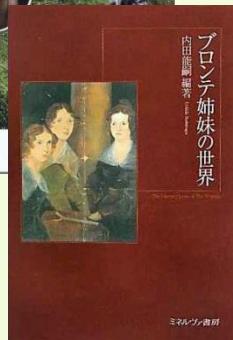
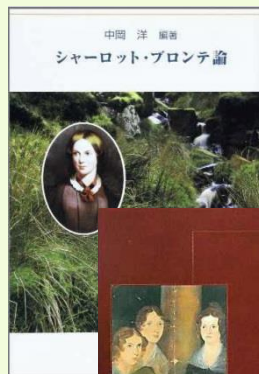
ブロンテ関係の論文として『ジェイン・エア』—情熱の開放と抑制』『ジェイン・エア』のナラティブに見る読者像』『ジェイン・エア』に見るメタファーとしての読書」「シャーロット・ブロンテと言葉の葛藤」「身体論で読む『ジェイン・エア』」「死の物語としての『ジェイン・エア』」「ジェイン・エアの経済学」「ミセス・フェアファックスの謎を考える」「『アグネス・グレイ』—評価」など、訳書として「エレンとホースフォール・ターナー 1886-92年（『シャーロット・ブロンテと大好きなネル』所収）」「パトリック・ボウアナージス」（『ブロンテ家の人々』上巻所収）などがある。

愛の三角関係を扱った小説は数限りなくあるが、『ジェイン・エア』ほど多義にわたる特異な解釈の受容史をもった作品はめずらしいだろう。男か女かわからないカラー・ベルという初版の作者名に対する憶測から始まり、ヨークシャーの片田舎にひっそりと暮らす三姉妹の文学的素養や環境に関する疑問、

「自伝」という副題を持つこの小説の伝記的要素とフィクション性の問題など、出版当初から圧倒的な売れ行きを見せた成功の裏には、常に多くの謎と解釈の可能性が付きまといっている。

講演では、『ジェイン・エア』に見られる孤独、追放、幽閉、死のテーマ、家父長制社会とフェミニズム、恋愛小説としての特異性、小説(fiction)としての限界、怪奇・ゴシック小説的要素、ロマンティズムとリアリズムの問題、シャーロットのユーモア、ハッピー・エンディングか否か？ポストコロニアリズム的読み方などの観点から、作品の名場面を紹介するとともに、伝記的事実を交えながら具体的に考えてみたい。

様々な訳者によって新訳が次々と生まれ、映画、テレビドラマ、さらには舞台劇やミュージカルとしても度々取り上げられるこの名作を、もう一度読み直してみようと思っただけなら幸いである。（講師）



掲載論文などのある著書・共著(左から)  
 中岡洋編著『シャーロット・ブロンテ論』（開文社出版、2001年）第8章『ジェイン・エア』のナラティブに見る読者像  
 内田能嗣編著『ブロンテ姉妹の世界』（ミネルヴァ書房、2010年）第6章『アグネス・グレイ』—評価  
 ジュリエット・バーカー著、中岡洋・内田能嗣監訳『ブロンテ家の人々』上下巻（彩流社、2006年）第12章 パトリック・ボウアナージス

開催日時 2017年10月28日(土) 14:00～16:00

会場 総研ビル11階19会議室

受講料 無料（現役学生も歓迎です。なお非会員のお友だちをお誘いの際は、ハンドアウトの準備などもありますのでご一報ください）

申し込み方法 同封のハガキ(切手不要)で10月20日までにお申し込み下さい。

問い合わせ先 E-mail: aogaku.eibun.alumni2020@gmail.com

Tel: 03-3409-8990 (校友会大学部会事務局)